

新勅撰和歌集における冬部の構成と特質

岩 崎 禮 太 郎

新勅撰和歌集⁽¹⁾（以下、新勅撰集と略称する）冬部（巻第六冬歌）の歌を、配列順に主題によって分類すると、次のとおりとなる。

- 散紅葉（時雨）1 時雨3 散紅葉1 残紅葉2 散紅葉5
 2 冬月1 残菊3 時雨3 木の葉散る1 時雨5 冬嵐3
 霜枯1 霞3 冬の川1 水5 冬月2 千鳥5 雪26 うづみ
 火1 冬嵐1 歳暮6 （計81首）
 これを八代集における冬部の歌の主題配別一覽⁽²⁾に比べると、次の相違がある。

- (一) 新古今集にあつて新勅撰集にない主題 初冬 鶴 冬山里
 冬懐旧 冬江 鶯鷲^{をし} 鴨 鷹狩 炭がま
 (二) 八代集のいずれにもなくて新勅撰集にある主題
 なし

ところで、新勅撰集の冬部は、四季部の中において、秋部・春部に次いで歌数が多い。古今集以来、歌数の多い順序は秋・春・夏・冬という順序であったが、千載集において変動が起り、秋・春・冬・夏という順序になったが、冬九十首に対して夏八十九首というわず

新勅撰和歌集における冬部の構成と特質

か一首の違いでしかなかった。新古今集において、冬百五十六首に対して夏百十首と差がつき、この新勅撰集においては、冬八十一首に対して夏五十六首と差がついている。（新古今集・新勅撰集の全歌数は、それぞれ一九七九首・一三七四首である。）

次に、新古今・新勅撰の両集において、多く採られた主題の順に第六位まで並べると、

- 新古今 雪28 冬月21 時雨19 落葉17 歳暮16 千鳥11
 新勅撰 雪26 時雨11 落葉（散紅葉を含めて）8 歳暮6 千鳥5 水5

となつていて、六主題のうち五主題まで共通しているのは、主要主題として確保されているということであろう。そうして、前掲(一)の主題が割愛されたのは、歌集全体が新古今集と比べて規模の縮小という企画であつたので、やむを得なかつたと考えられるであろう。

二

この新勅撰集における冬部の構成と特質とについて、次に(一)から(4)までの項目に分けて考察する。

(1) 主題ごとの構成と特色

⑦落葉(散紅葉を含めて)

新勅撰集冬部における落葉の歌は八首で、そのうち「散紅葉」の歌が七首、「木の葉散る」の歌が一首であつて、「木の葉散る」の歌一首は時雨の歌群の中に置かれている。

冬歌よみ侍けるに

右衛門督為家

333 ふゆきてはしぐるる雲のたえまだによものこはのふらぬびぞなき

であつて、時雨と関連のある「木の葉散る」の歌である。

この落葉の歌八首は、新古今集冬部における落葉の歌が計十七首(そのうち「散紅葉」八「まさきのかづら散る」を含む)九首、「木の葉散る」八首)であるのに比べて、激減している。

この新勅撰集の「落葉」を主題とする歌の内容における大きな特色として、感傷的な歌が全くないということを挙げることができ。このことは、新古今集におけるそれらの歌と比較するとよくわかる。

「落葉」を主題とする新古今集の歌においては、

694 神な月風にもみぢの散る時はそはかとなく物ぞかなしき

(藤原高光)

695 木の落散る時雨やまがふ我が袖にもろき涙の色と見るまで

(通具)

696 しぐれつる袖もほしあへず足ひきの山の木の葉に風吹くころ

(信濃)

697 山里の風すさまじき夕暮に木の葉乱れて物ぞかなしき

(藤原秀能)

698 しぐれかか聞けば木の葉の降るものをそれにもぬる我がたもとかな

(藤原資隆)

という感傷的な歌があつた。

次に、新勅撰集において「落葉」を主題とする歌で注目すべき歌は、

366 つゆばかり袖だにぬれず神な月もみぢは雨とふりにふれども

(首禰好忠)

であつて、「つゆばかり袖だにぬれず」という否定的表現を用いているのである。そもそも、勅撰集において、落葉と時雨とを共に詠み落葉を時雨とまがうと詠んだ歌には、

木の葉ちる宿は聞き分くことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

(後拾遺・冬・源頼実)

もみぢ葉をさこそ嵐の払ふらめこの山もとも雨とふるなり(新古今・秋下・公経)

行く秋の形見なるべきもみぢ葉もあすは時雨と降りやまがはむ(新古今・秋下・兼宗)

があつたが、一方において、落葉と時雨との違いを詠んだ歌に、

紅葉散る音は時雨の心地して梢の空は曇らざりけり(後拾遺・冬・藤原家経)

まばらなるまきの板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらむ(千載・冬・俊成)

入り日さすきはの山べのははそ原曇らぬ雨と木の葉ふりつつ(新古今・秋下・曾爾好忠)

がある。右の三首の歌は、落葉は雨に似ているけれども、また異なる点のあることを詠んでいる。ところで、366の歌は、落葉と時雨との違いを「袖だにぬれず」と表現しているのである。とにかく、この366の「袖だにぬれず」と詠んだ歌は、さきあげた新古今集の「落葉」を詠んだ歌³⁶⁶における感傷的詠嘆の姿勢と正反對のものを、はっきりと表現している歌として置かれている点に注目されるのである。

①時雨(付、感傷的な歌)

前項で見たように、新勅撰集においては、雨のように降る「落葉」には「袖がぬれない」(感傷しない意を含む)〔新古今集では落葉にも感傷している〕のである。けれども、「時雨」には「袖がぬれる」(感傷する意を含む)という、明白に対照的な構成をとっている。

「時雨」を主題とした歌で、感傷的な歌には、

363 いつもなほひまなき袖を神な月ぬらしそふるは時雨なりけり (相模)

381 ことわりの時雨の空は雲あれどながむる袖ぞかわくよもなき (紫式部)

がある。このような歌は新古今集にも含まれていた(578 580 586)のであった。

ちなみに、新勅撰集冬部における感傷的な歌は、右の時雨の歌二首ならびに、水を詠んだ、

399 ねやさむきねくたれがみのながき夜になみだのこほりむすば
ほれつつ (中宮但馬)

だけである。なお、さびしさを詠んだ歌には、

新勅撰和歌集における冬部の構成と特質

似さびしきはいつもながめのものなれどくまのみねのゆきのあけぼの (良経)

②雪

新勅撰集における冬の歌八一首は、新古今集における冬の歌一五六首の約五二パーセントに当たる。その中で、新勅撰集における「雪」を主題とする歌二六首は、新古今集における同二八首の約九三パーセントに当たる。このことは、本集が「雪」を主題とする歌を重んじていることを示すものである。

	新古今	新勅撰
山辺	10	21
人里	13	1
海辺	1	2
都	2	1
その他	2	4

雪の降った場所によって分類すると、別表のようになる。新古今集においては人里が多かったのに対して、新勅撰集においては圧倒的に山辺が多いのが特徴である。

本集における、「雪」を主題とした歌(409 434)においては、山を詠み、しかもいわゆる「長高い」歌が多い。特に、その初めの部分には、次に掲げるように、漢籍に典拠をもった歌があり、それに続いて万葉歌から言葉を取った、しかも長高い歌が多く並べられているのである。(調査した「典拠」「本歌」「参考歌」とともに記す。)

寛喜元年女御入内屏風、山野雪朝

前関白(注、道家)

409年さむき松の心もあらはれて花咲く色を見する雪かな

〔典拠〕 論語・子曰、歳寒フシデ然ル後ニ知ル松柏ニ之後ヲ凋ム也。

内大臣（注、実氏）

410あらはれて年あるみ世のしるしにや野にも山にもつもる白雪

〔典拠〕 詩、小雅・豊年之冬、必有積雪。

〔参考歌〕 万葉、卷二〇、家持「あたらしき年のはじめの初春のけふふる雪のいやしけよごと」

題しらず

権中納言長方

411ししまやふるのみやこはうづもれてならしのをかにみ雪つもれり（注、長方卿集所収）

〔参考歌〕 万葉、卷八、志貴皇子「神なびのいはせのもりのほととぎすならしのをかにいつか来鳴かむ」

412宮木引くそま山人はあともなしひばら杉原雪深くして（注、長方卿集所収）

〔本歌〕 万葉、卷十一「宮ぎ引く泉のそまに立つ民のやむ時もなく恋ひわたるかも」

正三位家隆

413高島やみをのそま山あたたえて氷も雪も深き冬かな（壬三集所収、三宮十五首歌）

〔本歌〕 拾遺、神楽歌、よみ人しらず「高島やみをの中山そま立てて作り重ねよ千代のなみくら」

〔参考歌〕 万葉、卷七「大み舟はててきもらふ高島のみをの勝野のなきさしおもほゆ」

賀茂重政

414まきもくのひばらの山も雪とちてまさきのかづらくる人もなし

〔参考歌〕 万葉、卷十一「まきむくのひはらもいまだ雲るねば子松がうれゆあわ雪流る」後拾遺、雑四、経信「旅ねする宿はみ山にとぢられてまさきのかづらくる人もなし」

題しらず

刑部卿範兼

416玉つばき緑の色も見えぬまでこせの冬野は雪ふりにけり

〔本歌〕 万葉、卷一「巨勢山こせのつらつらつばきつらつらに見つつしのはな巨勢の春野を」

百首歌、雪歌

関白左大臣（注、教実）

419をとめこの袖ふる雪の白妙に吉野の宮はさえぬ日もなし

〔本歌〕 万葉、卷四、柿本人麻呂「未通女をとめらが袖布留山の瑞垣みづがきの久しき時ゆ思ひきわれは」

堀川院に百首歌たてまつりける時

基俊

420おくやまのまつの葉しのぎふる雪は人だのめなる花にぞありける

〔参考歌〕 万葉、卷三、大伴安磨「奥山すがの昔の葉しのぎ降る雪の消なば惜しけむ雨な降りそね」

家歌合に、暮山雪といへる心を

前関白

434くれやすきひかずもゆきもひさにふるみむろのやまのまつのしたをれ

(本歌)万葉、卷十三「月日は行きかはれども久に経る三諸
の山の離宮地」

右にあげた、「雪」の歌群の最初に置かれている409の歌は、論語に基づいて倫理的な意味を含んでいる。次の410の歌は、詩経に基づいて国家的観点を含んでいる。このように漢籍に基づいた政教的な意味を含む和歌を置いたことは、実に珍しい特色である。

次は、410の歌の次に配列してある、「雪」を主題とした歌で、万葉歌をふまえた「たけ高い」歌について考えてみよう。

新古今集における「雪」の歌には、人里における雪を詠んだ歌が最も多くて十三首あり、また、山辺の雪を詠んだ歌も人家から見える岡の松などに降った雪を詠んだりして、松や竹などの緑と雪との色の対照の美しさが表わされている歌(662 670 672 673 683)が目につく。

しかるに、新勅撰集において「人里の雪」を詠んだのは、

建保六年内裏歌合、冬歌

入道前太政大臣(注、公経)

30 つま木こるやまぢもいまやたえぬらんさどにふかきけさの
しらゆき

だけであって、「雪」の歌二六首のうち二一首までが、遠くの山における雪を詠んでいて、「たけ高い」歌が多い。そうして、先にあげたように、万葉歌から言葉を取った歌が多いことも、「たけ高さ」を支えている場合があると考えられるのである。

新勅撰和歌集における冬部の構成と特質

ところで、新古今集の「雪」を主題とする歌においても、万葉歌もしくは万葉風の歌があるが、それは、

60 矢田の野の浅ぢ色づくあらち山峰のあわ雪寒くぞあるらし
(人丸) 「万葉、卷十に「寒くふるらし」として所収、作者未詳・柿本集所収」

61 初雪のふるの神杉うつもれてしめゆふ野べは冬ごもりせり
(長方)

(本歌) 万葉、卷十「石上布留の神杉神びにしわれや
さらさら恋に逢ひにける」

62 田子の浦に打ち出でて見れば白妙の富士の高ねに雪は降りつ
つ(赤人)
の三首に過ぎない。

ここで、新勅撰集の撰者である定家の万葉歌についての関心とその影響とについて考えてみよう。定家の、万葉歌を本家とした歌、またはそれを発想源とした歌の、年代的推移を見るに、定家三十九歳のときの正治初度百首における、

駒とめて袖うちらはらふかげもなしさのわたりの雪の夕暮
(新古今、冬、六七一)

は、万葉集卷三の
苦しくもふりくる雨かみわの崎さの渡りに家もあらなくに
(長忌寸奥麻呂)

を本歌としているが、雨を雪に変え、わびしさは景の中に溶け込ませ、主観を表面に出さず、印象鮮明な絵画的情趣の新古今の歌に構

成している。この正治初度百首の定家の歌には、万葉歌を本歌とした歌が他に二首あるが、いずれも新古今風に構成している。次に、定家が四十歳のとき詠んだ、千五百番歌合のための百首においては、万葉歌を本歌とした歌が七首あるけれども、いずれも新古今風に構成している。建保三年（定家54歳）の内大臣百首における、万葉歌を本歌とした十三首のうち、

たのめおきし後瀬の山のことやこひを祈りの命なりける

（寄名所恋）

（本歌）万葉、卷四、大伴家持「のちせ山のちもあはむとおもへこそ死ぬべきものを今日までも生けれ」

は、万葉歌を本歌として万葉風の歌になっていると言えるであろう。建保四年の内裏名所百首における、同様の歌六首のうち、

吉野川いとはかきはを越す浪のときはかきはぞわが君の御代

（雑・吉野川）

（本歌）万葉、卷七「吉野川石と柏と常磐なすわれは通はむ万代までに」

は、万葉風の歌と言えるであろう。建保四年の後鳥羽院百首には、万葉歌を本歌とした歌が十三首ある。その中の、

さゆりばのしられぬ恋もあるものを身より余りてゆく螢かな

（夏）

（本歌）万葉、卷八、大伴坂上郎女「夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ」後撰、夏「つつめども

かくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり」

の歌などを、安田章生氏は万葉調に近づいていると指摘しておられ

る。しかしながら、万葉の「夏の野の……」の歌は、上句の叙景のイメージを一転させ「知らえぬ恋」を導いて、下句において単純化して恋の苦しさを詠んでいるのに対して、定家の歌は、人事と自然とを重層させている。すなわち、「しられぬ恋」と「身より余りてゆく螢」とを対照させて複雑な恋の思いを幻想的に暗示することともに、夏の自然界の「さゆりば」と対照的な「身より余りてゆく螢」という夏の夜の景とを重層させて、幻想的な情調を漂わせて、妖艶な新古今風の歌に構成していると考えられる。次に、貞永元年（一二三二）の洞院撰政家百首（定家71歳）において、定家が万葉歌を本歌とした歌が三首あり、その中の一首、

欠にふるみむろの山のさかきばぞ月日はゆけど色もかはらぬ

（祝）

は、万葉集、卷十三「月日は行きかはれども欠に経る三諸の山の離宮地」を本歌としていて、万葉の古風を存していると言えるであろう。

このような、定家の万葉歌に関する関心が、新勅撰集編集に際しても働いたと考えられる。

新勅撰集における「雪」を主題とする歌で、万葉歌をふまえた歌は、前掲のようにその大部分（410 411 412 413 414 416 419）が万葉風の歌になっている。そうして、人里を離れて山辺の雪を詠んだ歌が多い。そこに、定家が新古今集の人里中心の「雪」を詠んだ歌群とは異なった特色を出そうとした意図を推測することができる。

次に、新勅撰集の「雪」の歌に感傷的な歌がないことにも注目される。かの新古今集の「雪」を主題とした歌においては、

初ふればかく憂さのみまさる世をしらで荒れたる庭につもる初雪
(紫式部)

初さびしさをいかにせよとて岡へなるならの葉したり雪の降るらむ
(藤原国房)

初降る雪にたく藻の煙かき絶えてさびしくもあるか塩釜の浦
(藤原兼実)

初ながむればわが山のはに雪白し都の人よあはれとも見よ
(慈円)

の四首が感傷的な歌になっているが、新勅撰集ではそのような歌が全くないのである。

④歳暮

「歳暮」を主題とする歌を新古今集と比べると、新古今集では十六首あるのに対して、新勅撰集ではわずか六首しかない。その六首の中に、年月の過ぎ行くのを川の流れたとえた歌が、

題しらず

鎌倉右大臣

437ものゆのやそうち河をゆく水の流れてはやき年の暮かな

五十首歌よませ侍りける事、惜歳暮といへる心を

入道二品親王道助

438とどめばや流れてはやき年なみのよどまぬ水はしがらみもなし
如願法師

440あすか河かはるふちせもあるものをせくかたしらぬ年の暮か

新勅撰和歌集における冬部の構成と特質

な

の三首ある。このような歌は新古今集では、

初石ばしる初瀬の河の波枕はやくも年の暮れにけるかな
の一首しかなかったのである。

ところで、新古今集の「歳暮」の歌においては、あらわに感傷を表現した歌があった(696 698 699 702 704 705)が、新勅撰集ではそのような歌はない。新勅撰集の前掲438の歌においては、「とどめばや」という言葉を用いて、年の暮れゆくのを惜しむ気持を出してはいるが、あらわな感傷的な主情語を表面に出していないのである。また、

439つらかりし袖の別れのそれならで惜しむをいそぐ年の暮かな
(家隆)〔道助法親王五十首和歌〕
の歌においても同様である。

また、新古今集の「歳暮」の歌群の最後は、

初老の浪越えける身こそかなしけれことしも今は末の松山
(寂蓮法師)

という感傷的な歌と、それに続く、

初けふごとにけふや限りと惜しめども又もことしにあひにける
かな(俊成)〔千五百番歌合〕

という、齢を重ねながら今年も晦日を迎えることができた感慨を表現した老翁(この歌の作られた建仁元年に俊成は八十八歳になっていた)のしみじみとした歌で終っているのに比べると、新勅撰集の歌群の最後の部分は、

441もしきの大官人もむれあつっこぞとやけふをあすは語らむ

412 ふる雪を空にぬきとぞたむけつる春のさかひに年の越ゆれば
(師氏)

という、知的趣向を重んじた歌によって終っており、感傷に流されることのない「歳暮」の歌群をなしている。

(2) 新古今歌風の系譜に連なる歌

小島吉雄氏は、構想的詠法による歌の中で、美しい絵画的情趣を展開する歌であって、美的憧憬を客観化した歌、気分を重心を置いた写景歌を、気分的もしくは構想的写景歌と呼んでおられる。新勅撰集冬部において、次にあげる三首は、この構想的写景歌に該当すると言えるであろう。

402 冬の夜はあまぎる雪に空さえて雲の波ちにこほる月かけ
(宜秋門院丹後)

403 山高みあけはなれゆく横雲の絶えまに見ゆる峰の白雪
(実朝)

404 わたの原やそ島白くふる雪のあまぎる波にまがふ舟
(家隆)

右の三首は、いずれも壮大な絵画的情趣を詠んだ歌であって、清らかな情調が漂っている。

次に、美しい絵画的情趣を示しているとは言い難いが、同じく構想的詠法による歌であって、言葉統きを重んじ、言語の感覚的表象力を駆使して観念的美の具象化をはかり、情調を漂わせた歌が、この集の冬部において次のように含まれている。

375 かささぎのわたすやいづこ夕霜の雲居に白き峰のかけはし

393 ふるさとの庭の日かげもさえくれて桐の落葉にあられふるなり
(家隆)

394 夕づく日さすがにうつるしはの戸にあられふきまく山おろしの風
(家隆)

414 あけわたる雲まの星の光まで山のは寒し峰の白雪 (家隆)
右の四首は、いずれも清らかな情調を漂わせている。特に414の歌は、たけ高い歌であって、しかもさえ徹った感覚をもつ沈静な美の世界をあらわしている歌である。

(3) 巧みな本歌取の歌
374 霜おかぬ人めも今はかれはてて松にとひくる風ぞかはらぬ
(有家)

(本歌) 古今、冬、源宗子「山里は冬ぞ寂しさまさりける人めも草もかれぬと思へば」(参考歌) 詞花、恋上、源家時「霜おかぬ人の心はうつろひておもがはりせぬしら菊の花」この有家の歌は、千五百番歌合の八百九十六番の歌であって、定家の歌「しほれ葉や露のかたみにおく霜もなお風ふく庭のよもぎふ」と合わせられ、判者定家によって、「霜おく草を詞にあらはさずして風吹松のおとにはれたる心おなじくめかるるもかくてこそいと宜聞え侍れ」と評されて、勝と判定されている。

404 わたの原やそ島白くふる雪のあまぎる波にまがふ舟
(家隆)

(本歌) 古今、羈旅、小野篁「わたの原やそ島かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつり舟」

本歌の羈旅の歌から言葉を取って巧みに叙景歌に変えて、広大な眺望の中の一点に焦点を当てている。

334 暮れやすき日数も雪も久にふるみむろの山の松の下折れ

(道家)

(本歌) 万葉、卷十三「月日は行きかはれども久に経る三諸の山の離宮地」

万葉の離宮の恒久を贅える本歌から言葉を取って、「ふる」を掛詞に働かせ、雪による松の下折れを詠んだ歌にしている点が巧みである。

(4) 古歌・先行歌の発想・表現に類似した歌

367 から錦むらむら残るもみち葉や秋のかたみのころもなるらむ

(匡房)

(参考歌) 拾遺、冬、僧正遍昭「から錦枝に一むらのこれはは秋のかたみをたたぬなるべし」

369 水のおもに浮かべる色の深ければもみちを波と見つるけふかな

(通房)

(参考歌) 古今、秋下、素性「もみち葉の流れてとまるみなとにはくれなる深き波やたつらむ」

386 山のは入り日のかげはさしながらふもとの里はしぐれてぞゆく

(藤原公重)

(参考歌) 新古今、冬、清輔「柴の戸に入り日の影はさしながらいかにしぐるる山辺なるらむ」

387 むら雲のと山の峰にかかると見ればしぐるるしがらきの里

(平経正)

新勅撰和歌集における冬部の構成と特質

(参考歌) 新古今、冬、西行法師「秋しのや外山の里やしぐらむ生駒のたけに雲のかかれる」

405 友千鳥むれてなきさにわたるなり沖のしらすにしほやみつらむ

(国信)

(参考歌) 新古今、冬、季能「さよ千鳥声こそ近くなるみ漏傾ぶく月に潮や満つらむ」

406 風吹けばなにはの浦の浜千鳥あしまに波の立ちるこそなけ

(源頭国)

(参考歌) 新古今、冬、祐子内親王家紀伊「浦風に吹上の浜の浜千鳥波立ちくらしよはには鳴くなり」

420 雪深き吉野の山の高ねより空さへさえていつる月かけ

(頭輔)

(参考歌) 金葉、冬、源雅光「あらし山雪ふりつもる高ねよりさえても出る夜半の月かな」

437 もののふのやそうち河をゆく水の流れてはやく年の暮かな

(実朝)

(本歌) 古今、冬、春道列樹「昨日といひ今日と暮してあすか川流れて早き月日なりけり」

(参考歌) 新古今、冬、藤原兼実「石ばしる初瀬の川の波枕はやくも年の暮れにけるかな」

このように、古歌あるいは先行歌の発想・表現に類似した歌もまじっている。

三

さて、新勅撰集の冬部を巻頭から順に、

362 神な月しぐれにあへるもみち葉のふかば散りなむ風のまにまに

363 いつもなほひまなき袖を神な月ぬらしそふるはしぐれなりけり

364 わび人や神な月とはなりにけむ涙のごとくふるしぐれかな

365 ちぢの色にいそぎし秋はずきにけり今はしぐれに何を染めま

し
このように見てゆくと、和歌の伝統を踏まえた、温雅で平明な風情中心の歌が続いている。という感じを受ける。そうしてまた、冬部の中には、二の(4)であげたような、古歌・先行歌の発想・表現に類似した平淡な歌が含まれていることが認められる。

しかしながら、二の(1)(2)(3)で考察したような特色をもっている。すなわち、新古今歌風の系譜に連なる歌を含んでいて、清白な情調の歌、沈静な美を表わした歌を蔵している。それとともに、新古今集とは違って、過度な感傷に傾くことを抑えている。また、構成に創意工夫がこらされ、最大の歌群である「雪」を主題とする歌群においては、論語や詩経に典拠をもつ歌から始めており、更に万葉風のたけ高い歌を多く配列し、新古今集において人里における雪の歌が多かったのに対して、山の雪の歌を多く配置している。このように新勅撰集独自の特色を出しているのである。

〔注〕

1 久曾神昇氏・樋口芳麻呂氏校訂『新勅撰和歌集』(岩波文庫 昭36年)による。

貞永元年(一二三二)十月を形式的奏覧日とし天福二年(一

二三四)六月を奏覧日とし、文曆二年(一二三五)三月を実質的完成日と考えておく。(岩波文庫、解題)

2 有吉保氏「新古今和歌集の研究・基盤と構成」二八一・二八二ページにおける岸上慎二氏著「中世文学Ⅱ」よりの引用による。ただし、新古今集の歌の主題については、久保田淳氏「新古今歌集全評釈、第三卷」によった。

3 新勅撰集においては一首の中に「山と野」「山と都」「山と里」を詠んだ歌があるので、この数の集計は歌数より多くなっている。

4 小著「新古今歌風とその周辺」一四二ページ

5 注4の著、二〇八ページ

6 安田章生氏「藤原定家研究」一三八・一三九ページ

7 赤羽淑氏が「定家は主観による自然への移入を拒否したと同時に、自然からの呼びかけにも応じなかった。この態度は、ある個人的感情で自然を捉えることを避けたもので、それはすなわちもつと広く大きな自然感情を獲得しようとする努力へつながらるものであった。」(「定家の歌境——正治・建仁期を中心にして——」)「ノートルダム清心女子大学国文学科紀要、第七号、昭49・3月」と述べておられることが思い合わされる。

8 小島吉雄氏「新古今和歌集の研究・続篇」一四〇ページ

9 この394の歌は、千五百番歌合八百九十八番の歌であって、良平の「大井川波はこの葉になりはてて峰に色なき嵐山かな」と合わされ、定家によって、柴の戸の冬のかげ、あられの音、山おろしのけしきもめのまへにむかへる心ちして誠にをかしくこ

そ見え待めれ」(有吉保氏『千五百番歌合の校本とその研究』による。)と評されて、勝と判定されている。

- 10 建久九年(一一九八)の守覚法親王家五十首の歌である。久保田淳氏は、守覚法親王家五十首における家隆の歌の中でこの「あけわたる……」の歌が「秀逸第一」であり、「この清白な世界の持つ美しさ、冴え徹った感覚は、新古今集では受け止められず、新勅撰集を待たねばならなかった」と述べておられる。(『新古今歌人の研究』七八五ページ)

- 11 有吉保氏『千五百番歌合の校本とその研究』による。